

## 気位・先・指導者心得 [川島次郎記録帳]

### 気位

- ・気位は技術が円熟して — 精神の鍛錬を極めて然る後自然に備わる
- ・気位とは自身から生ずる「気品」「威厳」であるということが出来る
- ・技に熟達しても — 精神伴わない時は気位備わらず
- ・不撓不屈の精神があつて犯し難い尊厳威風が備わり — 故意に模倣出来るものでない
- ・自身と慢心とは大いに異なり、一度慢心生ずれば斯道の進歩終わり也
- ・名月を被<sup>おほ</sup>へる雲の 知らぬ間に とほく消え行く ありさまにして
- ・黒雲を排して中天に懸かる<sup>こうこう</sup> 皓々たる名月の如き

### 先

- ・**先の先** 懸りの先・匂の先
- ・敵の技の起こりを速く洞察して直ちに打ち込んで機先を制する
- ・敵の先より更に先んずる先
- ・声なく — 香りなく — 形もなきに<sup>きよ</sup>覚<sup>おぼ</sup>って — 我から形に現すなり

### 先

— 先前の先 —

- ・敵が隙を認めて打つて来るを — 敵の先が功を奏しない前に先を取る

— 待ちの先 —

- ・敵からも懸かり — 我からも懸る故 — 摺り上げ・応じ・応じ返し等

### 後の先

— 先後の先 —

- ・敵から撃ち込み来る太刀を切り落とし — 敵の氣勢の弛む所を強く撃込み勝を制する

\***眼光の先**等も有る

## 指導者の心得

- ・正しき基礎を作る
- ・初心者は白紙なり — 赤くも・青くもなる — 指導者の責任重大
- ・常に精神の修養をし — 技術の練磨・模範を示す
- ・教える事は学ぶ事で指導法に就いて苦心するは指導者自身を高める
- ・相手の力を見て — 人を見て法を説く [疎より密に・大より小に]
- ・進歩に連れて様々の癖が生ずる — 早く見つけて矯正
- ・近間の癖の者は遠間にて打たす
- ・正しい打だけを打たせ — 正しくないのは当てさせず
- ・気の弱き者は引き立ててやる
- ・私の強い者には — 我を抑えてやる
- ・常に癖を直し欠点を矯めてやる事は大切なるも — 方法が適当で無いと [角を矯めて牛を殺す] 事になる
- ・長所を褒めて — 長所を助長せしめる
- ・自分の形にはめ込まず — 体格・性格・特長を活かし — 個性を発揮せしめる
- ・真 — 行 — 草
- ・人には器用・不器用あり

## 名人の境地

- ・極意とは絶えざる用心深さといえる
- ・敵と相対した場合 — 緊張した絶えざる用心が日常生活に及んで常住坐臥綿密なる用心深さを失わない人は極意に達した人といえる
- ・有る名優の言葉 — 初めて舞台に立つと見物人の顔が見えない — 芸が熟しはらが出来てくると誰が何処にいるかまでハッキリ見える  
先一人前なり — 多くの役者はそこで止まって名人になれぬ  
名人になるには見物人の顔が見えない様にならねばならない  
— 初めは見えぬは芸の未熟也 —  
人が見ているとか見てい無いとか超越して自分の芸に魂を打ち込んでいる境地 — 芸と自分が一枚になった気持ちなり  
仕事でも周囲の人の目が気になる様では本当の仕事は出来ぬ
- ・アントニオ少年 — 聖母マリア像の前で真心を込めて祈りの賛美歌を奉げていた  
其の歌声誠に美しい 或る日旅人が感動し頭を撫ぜ褒めて金を与えた 翌日から又自分の歌声を褒めてくれる者が居ないかと  
気になり純無垢なお祈りが出来なくなったと言う

取り越し苦労と言うものは存外無意味で単に現在の生活を煩わすに過ぎず